



日本女子体育大学

Dance Letter^{Vol.36}

<http://www.jwcpe.ac.jp/>

SHOWCASE 2019夏 1年生



江波戸理奈(1年生) SHOWCASE(A1クラス)

出席番号で偶然同じクラスになった18人、お互いにそわそわしながら始まった練習も時間が過ぎると注意をしあったり、自分たちで集まって音楽をかけて練習していたり、A1のことだけを考えていた4ヶ月間でした。どうしたら良くなるか、どこを揃えたらいいか、どのような表情で踊ればいいのかなど、全員で試行錯誤しながら作品に向き合いました。最初は昼練や放課後練の有無を確認しあっていましたが、それも日常の一部に、そして大切な時間になりました。悔しくて涙を流したり、様々な考えが頭の中を巡っていたりした時もありましたが、その何倍もみんなと笑い合った練習を今でも思い出します。二人の素晴らしい先輩方や担任の石川先生に観ていただいた練習も、円になって食事をしていた本番前も、先輩方からのサプライズで泣きながら踊った最後の練習も、二度と同じ時間を繰り返すことはできません。A1クラス18人全員で見ることでできたあの素晴らしい景色は、これからどんなことがあっても忘れることはないと思います。そして、踊りが好きだということを改めて感じました。これからも関わる全ての人や物や環境に感謝の気持ちを持って舞台に立ちたいと思います。素敵な経験を最高の仲間とすることができて幸せでした。



金子美月(1年生) SHOWCASE(A2クラス)

わたしたちA2クラスは、赤堀佑夏さんと杉本麗衣さんのもと、ティムバートンの世界観を作品を通して表現しました。他のクラスとは違った雰囲気の商品でしたが、映画をみんなで見ることで一人ひとりがイメージを強めることができ、本番の成功につながったのだと思います。A2クラスはそれぞれの意思が強く、その分他のクラスよりもお互いに衝突することが多かったように感じます。正直なことをいえば、本番の数日前まで先輩とともにクラスみんなで気持ちを伝え合う作業を行いました。しかしその時間は決して無駄ではなかったと考えています。仲間の本音を聞くことでより信頼できるようになり、本番に臨むことができました。憧れの日本女子体育大学に入学して、初めての仲間との初めての作品ということで、最初の頃の練習ではそれぞれが様子を伺っていました。しかし生身でぶつかることで、お互いにいいことを伝え合えるようになったと感じます。また先輩方の指導のもと、技術的な面だけではなくダンサーとしての姿勢を学ぶこともできました。今後このメンバーで踊ることはほとんどないと思いますが、経験を糧にしてそれぞれの活動に励んでいきたいと思っています。



高倉だりあ(1年生) SHOWCASE(A3クラス)

憧れの「ニチジョ」に来て初めての舞台。まだ学校にも慣れないままでのスタートで、誰もが期待と不安を胸にしていたと思います。先生見せまでの期間は、あまり明確なイメージをつかめていなかったこともあり、ただ与えられた振りをなぞっている状態でした。ギリギリまでとても焦り、不安だったのを覚えています。しかしそこから自主的に練習したり、話し合ってイメージを固めていったという時間を経て、一人一人の作品に対する意識が変わっていったように思います。本番では、作品タイトルである「夢幻泡影」、二度とない一瞬のとき、非常に儚い瞬間を会場のお客様と共有できたのではないかと思います。A3のみんなとこの作品を創り上げられたことは私の誇りです。

そして、自分が演者として舞台に立つことができるのは、多くのスタッフの皆さんの力があるからこそだと改めて実感することができました。舞台裏で声をかけてくださった方々、舞台環境を整えてくださった方々、細かい要望にもこたえてくださった音響、照明の方々、自分が考えていた以上にたくさんの方々の協力があるのだと痛感しました。

A3クラスを担当してくださった3年生のお2人には感謝の気持ちでいっぱいです。ニチジョでの最高のスタートを切ることができました。



中村絵梨香(1年生) SHOWCASE(B1クラス)

入学してから初めての舞台はあっという間にやってきました。クラスの仲間と振り付けの2人の先輩と顔合わせをした日は楽しい気持ちと不安な気持ち両方ありました。

放課後練習が始まり振り入れされると、自分の踊れなさにショックを受けました。周りのレベルの高さに日々驚かされるとともに刺激を受け、自分ももっと頑張らないといけないと思われました。そんな仲間の存在はとても大きく、作品が完成してからこの作品について深く理解したいと、それぞれのパートに込められた意味などを話し合いました。18人で同じ振りを踊っていても感じることは様々で、それを共有する時間はとても新鮮で新たなことに気づかされる時間でした。それを経て、踊ると空気感がガラッと変わり一体感も生まれました。

当日舞台に立つてからの8分間は驚くほどにあっという間で、みんなと踊れる幸せを噛み締めてこれまでの3ヶ月間を全て出し切る思いで踊りました。3ヶ月という短い期間でしたが、今までにないくらい濃い3ヶ月でした。それはいつも一緒にいてお互い高め合えるB1の仲間と、様々なことに挑戦させてくれて新たな経験を沢山させてくださった2人の先輩のおかげです。これからはまた次の舞台に向けて日々努力していきます。





西川好美(1年生) SHOWCASE(B2クラス)

入学して初めての舞台で、私たちは「シエル」を踊りました。この作品では考える機会をたくさん与えていただいて、作品とも自分自身とも向き合うことのできた貴重な時間となりました。ジャンルも経歴もバラバラなみんなが集まり、テクニックだけでなくダンスとの向き合い方や考え方もとても刺激を受けました。ユニゾンの少ない作品でしたが、最後の最後まで何をどう表現するのか、何を伝えたいのかを模索し、それを共有してお互いを高めていくことができました。バラバラの振りの中にも同じ方向を向いて踊っている感覚をつかむことができ、作品に対しての考えや思いを共有することの大切さを学びました。また、ダンスの表現には限界がないことを実感し、もっといろいろなところから刺激を受け、表現に活かしていきたいと思いました。ここをスタートラインに少しずつでも着実に進んでいきたいと思います。

今回私たちを信じて任せてくださった先輩方には本当に感謝しています。ここで感じたことを忘れず、多くの人に支えられ舞台で踊れることに感謝し、ダンサーとして、人として成長していけるよう頑張っていきたいです。

光岡真帆(1年生) SHOWCASE(B3クラス)

日本女子体育大学に入学してから初めての舞台であるSHOWCASEの練習に励んだ日々は色濃いものでした。私は初めてコンテンポラリーというジャンルに触れたのですが、慣れない技でも一生懸命あざを作りながら練習しました。そこで得たものは踊りの技術はもちろん、それ以上に大切なものがありました。それは、いつどんな時でも感謝を忘れないこと、自分を信じる、周りへ意識を向けて同じ舞台に立つ仲間を感じながら踊ることです。私たちB3クラスの振りをつけてくださった先輩は、いつでも私たち1人1人をみて個を大切にしてくださり寄り添ってくださいました。舞台に立つ直前まで「みんなと踊るんだよ。みんなを感じながら、空気を感じながら踊るんだよ。好きなようにやって!でもみんながいることを忘れないで。」とおっしゃっていました。

学校生活は周りのレベルの高さに圧倒され思うようにこなせないことばかりの日々でしたが、練習の時間は苦戦しつつも楽しく、とても充実していました。折れそうになっても支えてくれたB3のみんなと、自信のなかった私に初舞台で「挑戦」となるような振り付けを与えて下さった先輩2人の力を借りて、本番は優しさや愛とユーモアに溢れた作品をその空気と調和して踊れました。SHOWCASEまでの期間で経験したことや感情は必ず自分のこれからの糧にしたいです。先輩方、先生方、スタッフの方、観に来てくださった方、B3の仲間たち、全ての方に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました!



SHOWCASE 2019夏 振付者



栗田紗采・佐々木楓(3年生) SHOWCASE振付者(A1クラス)

SHOWCASEの企画を考え始めたのは12月後半頃です。ここからSHOWCASEはすでにスタートしていましたね。企画書が通りますように、水族館にあった願いを書く所へ願掛けをしました。懐かしい、通った時は本当に嬉しくて、でも同時に不安もありました。初めての顔合わせ、A1のみんなの第一印象は私たちより大人っぽい。数人幼い子もいましたが、キラキラしていて眩しかったです。これからこの子たちと一緒に作品を創っていくことにワクワクとドキドキでした。でもやっぱり順風満帆に進む訳もなく。

納得いかなくてあと1ヶ月のところで曲を変えるという最悪なことをしてしまったり、なかなか進んでいなくて不安に思わせてしまったことはいっぱいあります。本当にごめんなさい。他の人はどうであれ、本番の舞台A1クラスは最高でした。何より私たちはみんなに踊ってもらえて幸せだった。A1のみんなじゃなきゃ、「FitPut」は完成できなかったです。色々な日々があって、上手くいくこともいかないこともあって、でもどれも大切なものです。A1のみんなと出会えて良かった。みんなもそう思ってくれたらとても嬉しいですね。これからのみんなの活躍を期待し、私たちももっと飛びたいです。負けません!



赤堀佑夏・杉本麗衣(3年生) SHOWCASE振付者(A2クラス)

二年前、私たち自身も経験したSHOWCASEの舞台。一年生である彼女たちにとってはデビュー作であり、親元を離れて来た生徒もいる中での創作活動は感じる重みが全く違いました。

彼女たちの成長を見守る中、私たちも一年生だった頃の懐かしい新鮮な気持ちを思い出しながらも、当時振り付けしてくださった先輩方と同じ視線で見ることができ、たかが二年、されど二年を痛感しました。同時に、この二年間で私たちはたくさんの人に支えられていることに感謝の気持ちを改めて感じました。

私たちの作品はかなり色の濃いものに仕上がったと思いますが、それはA2クラスの彼女たちが持っている色が混ざり合ってきたものです。愛には形がないとはよくいったものです。私たちが表現するとしたらこの作品が一番の愛の形でしょう。彼女たちには、この作品を通してダンスだけではなく様々な場面、意味での表現の方法を得、自身と全力で向き合うことの大切さに気づいてもらえることができ、そしてなにより私たちなりの愛情が少しでも伝わっていたら光栄です。



石川みう・上野可南子(3年生) SHOWCASE振付者(A3クラス)

SHOWCASE夏という1年生にとって日女ではじめての晴れ舞台に私達2人が携われたこの機会はとても貴重な経験となりました。A3クラスはお互いの良いところを見つけ合っていく仲の良いクラスでした。その力を3ヶ月間継続して、最後まで同じ目標に向かってやり遂げてくれました。新しい大学生活と今までの自分の生活の違いに困惑しながらも戦い、向き合う姿を見て私たち自身も慣れた環境を思い直し、どのようにサポートしていくのか初心に返って考えることができました。

作品を創っていく中で、私達も振付者として未熟で悩んだり迷ったりと安定していけない状況にもついてきてくれました。指示出しが曖昧なところも1年生がそれぞれで読み取り表現してくれることで私達の表しかかった景色を創り出してくれました。本番1週間前、改めて作品についてイメージや踊りへの課題を自分たちで探り合い共通理解をする話し合いを行いました。そこでは私達が焦るほどのみんなの熱心な姿勢を感じました。

私達にとっても大きな挑戦であったSHOWCASE夏を最後まで成し遂げさせてくれたのは最大の活力であるA3のみんなの素直な姿勢と元気な笑顔でした。支えてくださった皆様、ありがとうございました。



甘利羽菜・荒澤来瞳(3年生) SHOWCASE振付者(B1クラス)

どんな人達が集まるのか全く分からない状況の中で振付に挑戦するのは非常に勇気のいることだった。1人ずつのことをよく理解した上で作品を創りたかったため、練習中1人1人をよく観ることを意識していた。

全員が魅力的で、静かな中からもエネルギーが溢れ出すような作品にしたいという思いがあったが、ただ振りを踊っているという段階からどのように脱していけばいいのかが難しかった。そのため、ある時期からは全員で話し合う時間を多く設け、作品テーマに関することやシーン展開のさせ方などそれぞれの考えを共有した。また、私達の作品への想いやこだわりを積極的に伝えるようになった。そうすることで意識が変わっていき1本ずつの通しに今までになかった緊張感とエネルギーが出てきた。そこからは私達がいなくても自主的に話し合い、作品を噛み砕き、どんどん自分達のものにしていく姿に何度も驚かされた。「作品を楽しむ」「自己プロデュースをする」ということを特に沢山伝えてきたが、本番では1人1人が本当に魅力的で楽しんでいるのが伝わった。そしてみんなのエネルギーに鳥肌がたちゾッとさせられた。こんな素敵な経験をさせてくれたB1のみんなに心から感謝したい。



内堀愛菜・岸元菜々子(3年生) SHOWCASE振付者(B2クラス)

大人数のダンサーに、2人1組で振付をすることは、初めての経験でした。作品について考え始めるのは、1年生が入学するずっと前です。私達は、振付者としてはもちろんですが、同時に3年生の先輩として、気軽に頼れる存在でなくてはなりませんでした。

1年生との顔合わせでは、初々しい17人を見てこれからが楽しみになり、作品のアイデアも大きく膨らんでいきました。そしてそのアイデアをペアに伝え、そこからまた自分1人では浮かばないような面白い発想があったり、意外な発見があったりして、作品の方向性がどんどん変わっていき、その膨らんでいく様子もとても楽しむことができました。そんな中で私達がこだわったのは道具です。「殻を破る」というテーマのモチーフとして額を想像していたのです。これまで小道具を使った作品を創ることはありましたが、人よりも大きい道具を使用した作品を創ることははじめてで、使い方に戸惑いました。しかし、2人の方向性は常に同じで表現したいものははっきりしていたため、試行錯誤しつつ常に観客目線で創作を続けました。そうしてできた作品を1年生はとても大切に、たくさん考えながら踊ってくれました。このようにショーケース1年生振付は、創作の楽しさや表現の楽しさを実感することができるとも貴重な経験となりました。



鈴木梨音・金子真帆(3年生) SHOWCASE振付者(B3クラス)

一年生にとってニチジョでのデビュー作となる作品の振付をさせていただき、作品を創る上で悩むことや不安になることがたくさんあったけれど、パートナー、ダンサーを信じて向き合うことで、成果を身にしてみることができました。真っ白な17人のダンサーは何事にも貪欲で、私たちこそ普段学ぶことができないことをダンサーたちから教えてもらいました。作品を創る上でも日々の生活の何気ない場面でも、一人一人とコミュニケーションをよく取ることで仲もよく、お互いを尊重しあえる関係を作ることができたと感じています。

私たちの知らないところで集まって練習をしていたり、リハ中も曖昧なところはその都度お互いに確認し合ったり、怪我をした人がいたら励まし合うなど、そんな姿を見て私たちも励まされました。そして、パートナーの存在は大きく、一人で進めなければいけない時に、改めて二人での会話や何気ない一言二言がとても大きいことに気づきました。お互いが自分では思いつかないような案を出し合うことで成り立つことができたと感じています。もう一度踊りたい、リハ期間に戻りたい、と少しでも思ってくれていたと思います。



ワークショップ

橋本美優(2年生) ロジャー・ファン・デル・ポエルさんのワークショップ

私は今回、Nederlands Dans Theaterのダンサーであるロジャー・ファン・デル・ポエルさんのワークショップに参加させて頂きました。

最初にクラシックバレエのバーレッスン、そしてセンターでのエクササイズを行いました。クラシックの音楽を使わずにポップスを用いたことがとても新鮮でした。ロジャーさんは、自分の身体の部位の稼働域や活動範囲を広げ、空間を大きく使うよう意識することを特に強調して教えて下さいました。縮こまったコンパクトな踊りではなく、ダイナミックな身体の動きを学ぶことができました。レパートリーの振り付けに入ると、その振り付けの特徴であった「メリハリ」を特に意識するように教わりました。はっきりとした部分と、繋がった動きの部分の表現の差をうまくつけられず、とても苦戦しました。ロジャーさんの動きひとつひとつをよく見て、限られた時間の中で少しでもそれに近づけるよう努力しました。

本当にたくさんの学びがあった3時間でした。このような素晴らしい経験を決して無駄にせず、今後の活動に繋げていけるよう努めます。

お忙しい中、私たちのためにわざわざ学校に足を運んでくださったロジャーさんに心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。





田中蘭(3年生) 機材ワークショップ

ダンス・プロデュース研究部では、年に数回機材WSを開催しています。SHOWCASEや部活動の発表会での舞台スタッフをする機会があるため、本校の卒業生でもある講師の宇野敦子先生をお迎えし、機材の種類や設置の仕方、扱い方などを指導して頂きます。実際に機材に触り、照明卓の操作や照明のシュート、仕込みを経験すると、舞台を完成させるために多くのスタッフの時間と手間がかかっていることが分かります。他にもスタッフとして勉強になるだけでなく、作品を創るうえで照明の種類やそれらの見え方、色や形のアレンジについて知識を得ることができるので、作品の幅を広げることに繋がり、創作者にはとても参考になると思います。裏方ではありますが、舞台スタッフを何度か経験することにより、振付者の思い描く照明を表現できた時にはダンサーとして舞台上上がった時とは違う達成感を感じることができます。そうしたことから、将来の選択肢の1つとして興味を持ってくれる学生もいるようです。講師の宇野先生は、いつか準備から本番までの全ての過程において学生のみで公演を創り上げることが理想だと仰っていたので、そこを目標にこれからも活動していきたいと思っています。

河野 陽(3年生) s**t kingz Oguriさんワークショップ

7月に行われたs**t kingzのメンバーであるOguriさんのWSに参加しました。今までニチジョでは、バレエやジャズダンス、コンテンポラリーダンスなどのWSはあったものの、ヒップホップを学ぶ機会はあまりありませんでした。そんな中、今回WSを受けて、新たにストリートダンスの視点から自分のダンスと向き合うことができ、勉強になることが多くありました。WSでは、重点的にアイソレーションやリズム取りをした後、コンビネーションをしました。リズムや身体の動かし方はもちろんですが、グルーブ感が特に難しかったです。自分の踊りは音楽に乗り切れていない感じがして、思うように体が動かず、はじめは気持ちよく踊ることができませんでした。しかし、Oguriさんの、ダンスが楽しくて仕方がないと言わんばかりの踊りを見て、ただ振りをなぞるだけではなく、楽しんで踊ろうというふう意識を変えてみたら、自然と気持ちよく踊ることができました。Oguriさんのお話にもあったように、踊るうえで1番大切なことはダンスが好き、ダンスが楽しいという気持ちだということを実感しました。まだまだここには書ききれないほどたくさんのことを今回は学ぶことができ、とても貴重な経験でした。



桑畑瑠美奈(2年生) アントニー・リッチーさんワークショップ

2日間に渡り行われたフォーサイスカンパニーのメインダンサーだったアントニー・リッチーさんのWSを受講させて頂きました。アントニーさんは振りを丁寧に伝えて下さるだけでなく、分かりやすい例えにして表現して下さいたので普段コンテンポラリーダンスをしていない私でも振りをスムーズに身体に入れる事が出来ました。また振りを与えられた後すぐに動くのではなくアームスだけ先に確認する事で全体像をイメージ出来たので普段より踊りやすくなりました。結果、ひと流れで動く部分、しっかり止める部分が明確になり、振りに強弱をつける事にも繋がりました。「点」と「点」を繋ぐと「線」になり、「線」と「線」を繋ぐと「図形」になり、「図形」と「図形」を繋ぐと「立体」になり、そこに身体表現が加わると無限の可能性が広がります。この話に当てはめると初日の1番最初に行った身体の中や空間の中の「点」を探すエクササイズと、2日目の最後に行ったWSの中で習得した振りを全てミックスして自分だけのソロ作品を作るエクササイズは全て繋がっていたのだと強く感じました。この経験を大切にふと目に留まったものからダンスを生み出す事を続けることで引き出しを増やし、自分の可能性を広げていきたいです。貴重な機会をありがとうございました。



前期授業

秋谷結音(4年生) スペイン舞踊2

スペイン舞踊を受けてみて、世界の文化に触れ、本当に素晴らしい世界があると感じました。スペイン舞踊といえば、スカートをを使って風のように軽く舞う時もあれば、雷が轟くように足のリズムを奏でる時もあります。心の中の表現では、足を打ち鳴らす時には苦しみや悲しみ、怒りを外に出していく情熱的な踊りが特徴です。この音を自分で奏でることは至難の業でした。最初の頃は足を床に打ち付けるたびに痺れが止まらず、上手く音が鳴らなかつたり、特殊なリズムに戸惑ったりする事が多くありました。そんな学生にも真剣に教えて下さった先生には感謝の気持ちでいっぱいです。これからもっとスペイン舞踊について学びたい、見たいという気持ちでいっぱいになりました。このスペイン舞踊を通して、感情を重視して踊る事がこんなに開放的になれるということも知りました。プロのスペイン舞踊の先生に教えていただき、試験ではプロの演奏家の演奏をバックに踊れた経験は、今後の舞踊人生において大切な時間となりました。技術はまだですが、心から楽しいと思うのがダンスの醍醐味ですので幸せな授業を体験する事ができました。本当にありがとうございました。



小泉結佳(2年生) 野外上演法

野外上演法という授業の中で、私は全体のリーダーという立場で作品作りに関わっていきました。テーマを決める時点で少々問題があったものの、「メリーポピンズ」というテーマで授業が動いていくこととなりました。学年全体でひとつの作品を作るためには、各クラスのリーダーだけでなく、一人一人が積極的に動いていくことが大切でした。構成を確認するにも100人あまりの人に一人ずつ指示を出す時間はありません。そんな中で、各リーダーが計画的に練習を組んだことや、授業後のフォローがあったからこそ、作品が完成したと思います。普段基本的に、私たちは舞台の上でしか踊っていません。そんな中、グラウンドというとても広い空間で、100人規模の出演者で構成される作品を「踊る・作る」機会はないと思います。普段とは違った作品への関わり方、踊り方、表現の仕方がこの授業で得られたのではないかと思います。また、これから研究室を選んで同じ学年の仲間と活動を進めていく中でも、今回の授業で得られた他クラスとの交流が生きていくと感じました。私たちの「メリーポピンズ」という作品が、観てくださった皆さんにとって心躍るものになっていたらうれしいです。



福島愛菜(1年生) タップダンス

タップダンスの授業はとても魅力に溢れ、充実した時間でした。タップダンスは初めてでしたが今まで習ってきたバレエの基礎を活かし、明るい先生と共に新たな踊りに触れることができ楽しかったです。はじめはタップシューズを履いて踊るのではなく、ジャズシューズでのステップ練習を行い、バレエ同様、ターンアウトや体幹の重要性を教わりました。

「タップダンスは音楽と共に踊ることが重要で、練習をすればするほど成果がでる」という先生のお言葉を胸に多くのことを学び、練習し、心から楽しく踊るまでに成長できました。また、何度も手拍子や言葉でリズムをとる練習をし、心身一体となり、身体から音を奏でるという感覚を得られ感動しました。

タップダンスはエンターテインメント性が高く、みんなで1つとなり踊る楽しさを視覚、聴覚を肌で感じるができます。ほかの踊りとちがう楽しさを味わえたこと、そして心から楽しんで踊るということを学ぶことができたことがうれしかったです。この授業で学んだ多くのことを今後に活かしていきたいです。



集中講義

根岸咲和(2年生) ダンスカレントA

9月10日から13日にかけての4日間、舞台音楽(青木先生)と舞台照明(宇野先生)について学ぶダンスカレントAの集中講義が行われました。

講義は、実践を交えながらそれぞれの基礎を学んだ後、最終日に行われる発表に向け準備を進める形で展開されました。この発表は、モデル作品として示された無音の「振付」に対し、各グループで生演奏を含む音楽構成と照明プランを作り、各々で決めたテーマを「作品」として昇華させるものでした。発表では、同じ素材を用いながらも音と明かりによってグループごとに全く異なる作品が生まれていたことが印象的でした。

ダンサーとして踊る機会が多い私たちですが、普段はきちんと見えていない世界に触れることで、音響や照明がいかに大切な舞台の構成要素であり、繊細で劇的なものであるかという一面を、身をもって感じるできました。舞台の上の効果だけではなく、そもそも光とは影とは何なのか、音とは音楽とは何なのかについても考えさせられる4日間でした。

プロとして活躍されている2名の先生方下、とても密度の濃い学びの時間が与えられたことに感謝して、これからの活動に生かしていきたいと思っています。



本間愛良(4年生) ダンスカレントB

ダンスカレントBの授業では、トムソン啓子先生によるリモンテクニックの授業を行いました。学生数が3人だけと、少ない人数で行ったので一人一人細かく見てもらえたので、とても充実した4日間となりました。まず、座った時の姿勢から下を向くだけの動作だけでも実際に癖などが見えたりと、シンプルな動作の中から自分がどう動いているのか、どのように直したら良いのかなど、とても勉強になる授業でした。サスペンションをすることをはじめとして、力の抜き方などを学びました。毎回の授業の後半では、講義を行い、リモンテクニックのダンスの映像を見ました。リモンテクニックの基本的な動きを見て、感じなどを捉えることができました。また、リモンテクニックの動きを使ったインプロヴィゼーションを行い、振りを自分でパラパラにつなげて踊ったり、それぞれ考えた短い振りを共有し、つなげて、タイミングをその場で感じながら一緒に踊ったりしました。難しいながらもとても楽しいインプロヴィゼーションでした。また、自分の動きを1人ずつビデオに撮って動きを確認していくことをしたりと、勉強になり、自分を見つめ直すことができ、とても濃い集中講義となりました。



富田奈保子(3年生) 舞踊学演習(テクニク&レパートリー)

4日間、1日1日が濃い授業でした。

授業の最初では、自分自身の身体を感じ知る所から始まり、普段意識しないような所に注目し、自分の身体はまだまだ使えていない所がある事を知りました。クロスフロアなどでは最初に意識した所を今度は実際に使うことに意識を向け動いていきました。普段だったら思い切りできるような動きも意識一つでこんなにも変わることを実感しました。使えていない所を4日間で感じられたので普段から意識しながら踊り、ブレない身体を目指したいと思いました。

そして、この授業では作品を踊ることがメインで、今回はネオクラシックの女性ソロ「ショパン エチュード」、コンテンポラリーの男性ソロ「who is Us?」そして「Hamlet」の3作品の振りうつしをして頂きました。

どの作品も共通して感じたことは、一つ一つの動きがとても繊細で、音の取り方、手の動き、足の動き、それぞれの軌道など、動き方が違うと全く別のもの、別の表現に見えることでした。さらにクラシックの基礎がとても大切ということも3作品踊っている中でとても実感しました。中村恵恵さんの授業を4日間も受ける事ができ、また間近で中村恵恵さんの踊りを観ることができ、とても貴重な経験でした。今回学んだ事を、次は自分自身が作品を踊る際、創る際に活かしていきたいと思っています。



小澤玲奈(3年生) 現代の舞踊論

私は勝川史憲先生の「現代の舞踊論」を受講し、身体の骨、関節、筋肉、体幹、身体を構成するための栄養などについて、踊るという視点から考えていきました。そしてそれを自分の身体に置き換えてどのような動かし方をするのが効果的で負荷がかかりにくいのかなどを考えていくことを学びました。普段私がよく行うトレーニングは筋肉を短く使い、短時間で鍛えるようなもので、それらは瞬発力のある、大きくダイナミックな動きを行うときに有効ですが、授業では、筋肉を長く使い、伸びやかに持久性があるような、エキセントリックな収縮をもっと色んなものに取り入れることも重要であると教わりました。どのような踊りでも、筋肉の瞬発力、持久力共に大切であり、それらのメリハリが重要ですが、筋肉を長く使うトレーニングは今まであまり考えていなかったと気づきました。そこから私は特に、自分の身体の筋肉や体幹と骨、関節などの構造、構成、バランスなどを少し動かしながら理解することで自分の身体の可動域、動かし方、解し方を再度見つめ直すようになりました。踊って動くことで身体に覚えさせ気づかせるだけでなく、知識として人体の構造、構成を理解することで、身体の内部から動いていけるような感覚を得ることができ、自分の身体の動きを開拓していくことが出来ました。勝川先生、本当にありがとうございました。



コンクール

尾上実梨 平田祐香(4年生) アーティスティック・ムーブメント・イン・トヤマ

私は大学に入学するまでソロ作品を踊ることが多く、誰かと踊るということに憧れを持っていました。ソロを踊ることや大人数で踊ることももちろん難しく大変なことではありますが、少人数で踊るというのはチームの力だけでなく個々の力も非常に重要なものだと思っています。今回、同学年である平田さんと一から作品を創ることを通してダンス創作の難しさやデュオにおいての個人の力の重要さなどを改めて実感しました。

時には喧嘩しながら、納得のいくまで何度も何度も作品を練り直しました。1年間同じ作品を踊るというのは2人とも初めての経験でしたが、おもしろい作品を創ろうとすることはそれ程難しいことなのだと思います。

そうして創った大切な作品が今回のコンペティションで「松本千代栄賞」というとても嬉しい結果を頂くことができました。しかし、不十分な箇所もあり、私達2人にとって「独白」という作品は、もっと良くなる作品だと思っています。

今回の経験を生かし、まずは卒業公演で、観ている人もおもしろいと思うような作品を創れるよう頑張りたいと思います。



舟橋あかり(4年生) モダンダンス部(全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸))

私達は、毎年夏に行われる全日本高校・大学ダンスフェスティバル(神戸)において、「日本女子体育連盟会長賞」を頂きました。

大会に臨むまでの過程は、決して楽なものではなく、仲間と何度もぶつかりながら作品を創り上げていきました。

モダンダンス部にしか出来ない表現を追求していく中で、たどり着いたのは「呼吸」と「感情を爆発させる」ことでした。毎日の練習で音をかけずに呼吸で振りを合わせたり、部員同士で踊りを見合っ、感情を爆発させる踊りはどうすればいいのかアドバイスもありました。意識しても揃わない事も何回もありましたが、みんなの呼吸を聞いて練習していくと、自然と仲間の結束も強くなっていきました。この作品の創作を通して、部員1人1人が悩み考え続けた経験は、今後の創作をしていく中で糧となると思います。これからもっと成長出来る様、部員一同努力して参ります。

大会に参加するにあたりで指導して下さいました坂本先生、応援して下さいました方々にお礼申し上げます。ありがとうございました。



部活動サークル活動

富田華(4年生) 舞踊部(4年生引退公演)

4年生引退公演としての舞踊部発表会。例年では年に一度12月に行われていた発表会でしたが、今年度から時期を変更することになったため、この度私たち4年生の引退公演を別に行うこととなりました。4年生が全作品を振り付け、演出も工夫し、私たちの想いがたくさん詰まった公演をつくりあげることができました。特に、4年生だけで踊った作品は思い入れが強い。様々なジャンルのダンサーがいて一人一人の個性はあるものの、みんなで集まると楽しくなって踊り出してしまう、そんな私たちらしさが存分に伝わるような作品だったと思います。この公演が実現できたのも、松山善弘先生と宮本乙女先生、助手の皆様、スタッフの皆様、そして何よりこの公演をたくさん支えてくれた三役をはじめとする後輩の皆さんのご協力があったからです。関わってくださった全ての皆様に本当に感謝しています。そして、4年間を共にした同期の仲間たち。みんなはかけがえのない大切な存在です。みんなが同期で本当に良かった。私はいつまでもこの公演を忘れないと思います。本当にありがとうございました。最後に、今後の舞踊部の活躍も楽しみにしています。



兼平普(3年生) ダンス・プロデュース研究部(ぴちぴちやぶちやぶらんらん'19公演)

今年度もダンス・プロデュース研究部は「ぴちぴちやぶちやぶらんらん2019」公演に無事幕を下すことが出来ました。5月11,12日の2日間3公演、沢山のお客様にご来場頂き誠にありがとうございました。今回は北尾匡さん、スズキ拓朗さん、KENTARO!!さんのお三方に振り付けをして頂きましたが、3つそれぞれの作品におけるダンスという考えや概念の違いを感じとても面白くまた勉強になりました。わたしは今回制作というポジションで公演の裏側にたち、普段一緒に授業を受けている同期や先輩後輩をダンサーという枠の外側からみて新しい一面を見つけたり、振付師の世界に入っていくみんなを外からなのに、とても近い距離で見ていることにすごく不思議な感覚を覚えました。また、前回の自主公演に引き続き制作をしていて1つの公演を完成させて更に成功へと導くのは裏でこんなに人も手間、時間が割かれていることを肌で感じ、舞台上に立てるといふことに沢山の人の感謝の気持ちを忘れてはいけなと強く思いました。表に立つ人として裏側を知ることはとても良い経験であり大切なことだと感じました。

今回公演を行うにあたって携わってくださった全ての方に感謝申し上げます。ありがとうございました。



小野塚茉央(3年生) ダンス・プロデュース研究部(世田谷文学館)

世田谷文学館WS「ことばとからだ」は世田谷文学館さんとダンス・プロデュース研究部との提携企画で2014年度から始まり、今回で6度目の開催でした。この企画は参加者の小学1～6年生とWS講師である部員が、一緒に身体を動かし、考えながら遊ぶ中で、身体表現の方法について学び、発見するというものです。私は今回、本企画のリーダーをやらせていただき主に企画作りや当日の進行を行いました。メインの企画では分かれた4チームごとに「夏といえば」で思いつくことをテーマに決め、あらかじめ中央に穴をあけた、大きなクラフト紙にテーマに合った絵を自由に描き、衣装のように着用。その後テーマに沿った作品創りを行い、最後には発表会を行いました。大人数の子どもたちと身体を動かして遊ぶことや、一緒に作品創りをするのは中々ない機会。そのため子どもたちの体力や集中力、アイデアには驚かされることばかりでした。表現したいものをどうすれば身体で表せるのかということに、真っすぐな眼差しで向かい合う子どもたちの表情はとても刺激的で、自身の踊りや身体との向き合い方、伝えたいと思うことの重要性を改めて感じさせられる1日となりました。そして、何よりも子どもたちの「楽しかった」という声が嬉しかった1日でした。



古屋敷琴乃(2年生) ダンス・プロデュース研究部(サマーダンスセミナーin南郷)

8月16日から4日間、「サマーダンスセミナーin南郷」のために青森に向かいました。このセミナーは青森県八戸市で行われ、ダンスと一緒に共有したいという気持ちが集まった有志による、様々なジャンルの作品を地域の年齢を超えた受講者と一緒に作り上げていくという企画で、本学卒業生の昆賀子先生と南郷文化ホールとの共催です。バレエ・ジャズ・モダン・コンテンポラリー・インプロヴィゼーションの5つのジャンルに分かれてワークショップを行いました。

小学生から60代の方まで幅広い年齢の方を対象に、セミナーはスタートしました。一コマ70分の充実したワークショップを展開し、受講者に合わせた内容やアドバイスをするのは、大学生にとっても刺激のある時間でした。最終日には南郷文化ホールにてプロの音響と照明を浴びながら、3日間の成果を存分に発揮することが出来ました。何より受講者の方々が生き生きと踊っている様子を見て、改めてダンスの奥深さに気がつくしました。

参加してくれたダンプロの学生の皆さん、様々な方面からご支援をくださった先生方やスタッフさんのおかげでスムーズに進めることができ、南郷の自然溢れる環境で集中して取り組むことが出来ました。2年に一度の開催ですが、是非これからも継続し南郷との繋がりを大切にしたいと思います。ありがとうございました。



NEWS

【第72回全国中学校・高等学校ダンスコンクール】

2019.11.23(土・祝) @メルパルクホールTOKYO

【第18回舞踊学専攻卒業公演】

2020.1.21(火) @府中の森芸術劇場 ドリーむホール

編集後記

最後までご覧いただきありがとうございます。大学では後期授業が始まり、学生はそれぞれの目標に向け精進しております。

このダンスレターで舞踊学専攻の魅力が読者の皆様に伝わっていれば幸いです。来年度もダンスレターをよろしくお願い致します。

田中蘭、松本真里奈



発行

〒157-8565 東京都世田谷区北烏山8-19-1
日本女子体育大学 運動科学科 舞踊学専攻

発行日:2019年11月23日(土)

<http://www.jwcpe.ac.jp/>